

銀髪『晴翔』の成長日記

小祐璃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遠月茶寮学園の高等部編入試験に合格した秀才かつ天才の主人公 楓鷲 晴翔（ふうが はると）の成長する話です。

基本は原作沿いです。

晴翔が遠月学園で成長していきます。記憶が戻ると最強？になります。あと、原作キャラ崩壊の可能性大アリです！

リアルの事情により、すごく更新が遅くなります。すいません。

目次

第1章	遠月学園のエリート校に僕が!!	
?		
第1話	遠月学園とか無理だつて!	44
1		
第2話	入学式から創真君のせいで大変です。	48
第3話	極星寮の腕試し 歓迎会その	55
1		
第4話	歓迎会その2	59
第5話	歓迎会その3	64
第6話	研究会に入りますか?	28
第7話	晴翔の幼少期と記憶	33
第8話	創真の食戟と地獄の合宿?	37
	地獄の合宿	
	第9話 地獄の合宿1日目	1
	第10話 地獄の合宿1日目	2
	第11話 地獄の合宿1日目	3
	第12話 地獄の合宿2日目	1
	第13話 地獄の合宿2日目	2

第14話	地獄の合宿	3日目、4日	
目	1		68
第15話	地獄の合宿4日目	2	
72			
第16話	地獄の合宿終了!	—	76
秋の選抜			
第17話	汐見ゼミへ	—	80
第18話	秋の選抜	予選 B	ブ
ロック	—		84
第19話	秋の選抜	予選 A	ブ
ク	—		88
第20話の秋の選抜	本戦第1回戦		
前半	—		92

第1章 遠月学園のエリート校に僕が!?!?

第1話 遠月学園とか無理だつて!

未「晴、あんた高校どこいくのよ」

ここ最近、母親がよく聞いてくる。

晴「うちの家、定食屋なんだから高校行かなくてもよくない? 料理師の免許取ればできるでしょ? それに、学校とかだるい」

毎回同じことを言っただけで聞こえてないらしいです。

あ、どうも。晴翔つてもんです。今は中3で母親と父親がいます。

父親は「旅に出る」って言い出して、4年くらいあつてないです。

定食屋は母親とバイトさんの宮白さんと涼君と僕でやってます。

夜になると母親vs僕で料理対決を毎日のようにします。が、未だに勝てません。そろそろ時間なので店を閉めないといと:

ガラガラ

晴「もう、うちは閉まりますよー」

あれ、お客さん入っちゃった。しつかりと言わなきゃな。

晴「お客さんー、もう閉店ですよー?」

? 「ん? もしかして、晴翔か?」

なんでこの人は僕の名前を知っているのだろうか?

未「あら、秋さん。お帰りなさい。今回はどうでした?」

あれ、母さんの知り合い? 秋さんってもしかして:

晴「父さんなの:??」

秋「おう! やつぱり晴翔か! 大きくなったな!」

やつぱり父さんだったよ。連絡なしに帰ってきたのか:

秋「未恵から高校行かない。って聞いたから来たんだぞ。お前、ここを継ぎたいんだ

ろ?」

晴「もちろんだよ。この定食屋『カエデ』でお客さんを笑顔にさせるのが僕の夢だか

らね!」

今はまだ無理かもしれないけど:

秋「なら、お前はここの高校に行くべきだ! 卒業して来たらここを継ぐ権利を与えよ

う!」

渡された紙には「遠月茶寮学園高等部編入試験説明」と書かれていた。

晴「ええ! あの遠月学園じゃん! 僕なんかじゃ絶対無理だよ! 絶対に落とされるって

！」

そう。あの遠月学園である。卒業到達率が10%以下で在籍していただけて料理人としてすごいと言われるのだ。卒業をすると料理人として、トップに立つことが許されるとゆう、もう、なんかいろいろとすごいところなのだ。

未「大丈夫だよ。晴なら卒業までいけるから。お母さん、期待してるよ。」

いやいや絶対に無理なんだって。僕なんてまだまだ半人前なんだから。

秋「自信を持って！俺の息子なら絶対に行けるんだから！」

いや、どんだけ息子に期待してるんですかー。

未「明日だからね！今から寝て、明日は合格を貰って帰って来るのよ！」

はあ、もう諦めよう。せめて、恥はかかないように全力を出そうかな。

試験管さんに美味しいって言われたいな。

晴「ここで本当にあつてるんだろな。」

表現できないくらいバカでかい敷地を目の前にして口をこぼした。

中に入ると進級できなかつたお坊ちやま達がいたけど全力で無視しましたよ

試験会場着きました。試験管さんの登場です。

ん？あれって『神の舌』を持っていてる難切えりなさんじゃないですか。

やばいですね。これは90%以上落ちましたよ。周りのお坊ちやま達は逃げ帰って
ますけど受けないで落ちたくはないので残りますよ。

晴「卵料理ならなんでもいいんですか?」

?「作る料理はなんでもいいの?」

ん?赤髪君も残ってるのか。度胸あるなー

え「卵さえ使っていればなんでもいいわ。でもやるの?帰るなら今よ?」

秋「受けないで落ちるなんていやですから。それに、あなたに食べてもらえるなんて
光栄ですの。」

?「え?こいつってすごい人なの?」

えー、知らないんだ。

緋「この方は中等部主席にして学校の最高意思決定機関遠月十傑評議会のメンバー
『雑切えりな』様だ!」

すごく慕っているんですね。あの秘書子さんは

え「で、本当に私の試験を受けるの?」

?「受けるよ?美味いって言わせりゃいいんだろ?」

すごい意思だな、あの赤髪君は。僕には難しいや。

え「楓鷲晴翔君も受けるの?」

晴「もちろん！最大の気持ちで挑ませていただきますよ！」
すごく緊張しております。赤髪君は余裕そうだな。

え「それで、何を作るのかしら？」

卵だったらみんなを笑顔にできたあれかな。

晴「僕は『ドレス・ド・オムライス』かな」

あの卵の形が好きなんだよね

つて、赤髪君作り始めてるし。

え「幸平創真君、あなたは何を作ってるの？」

創「え？まだわからないの？」

いや、僕もわからないんだけど…

創「食事処『ゆきひら』裏メニューその8ふりかけご飯だ。もちろん、普通のではな

く

化けるふりかけご飯だ。」

どんな風に化けるんだろうか？食べてみたいな。

つてやばいな。はやく作り始めよう。

まずご飯を炊いて、焼肉のソースと混ぜる。

なじませてる間にタマネギをみじん切りと鶏肉を適当に切る。

バターをーひいて鶏肉、タマネギの順に入れて炒める。

ご飯を投入!

あ、赤髪君はもうできたんだね。美味しそうだ。本当に化けてるし。

えりなさんは美味しそうに食べてるのに不味いつて言ってる。なんでだろうか?

おっと、そろそろだから塩コショウを振って茶碗に入れてひっくり返す。

これでご飯は完成だな。

卵を溶いて固まり始めたら端っこを掴んで真ん中に

フライパンを回転させてそのままご飯の上に

これで完成や!

晴「できました。先ほどの料理より、ダメだと思えますがどうぞ」

え「ええ。頂くわね。」

え「まあ、基本的に忠実つてとこね。いいでしょう。逃げなかった意思を評価して編入を許可します。」

あれ、こんなに優しい人なの? まあ、ラッキー!

晴「ありがとうございます。次は美味しいと言わせるくらいに成長しますよ!」

え「精々退学にならないことね。」

やったー! 編入許可だ!

あ、さっきの赤髪君の料理残ってる。一口だけ食べてみよっかな。
パクリ

え！なにこの美味しさ！僕じゃこんなのも無理かな。なんで不合格なんだろう？
とりあえず帰ろう。

さっきの赤髪君発見！話しかけてみよ。

晴「ねえ、そこの赤髪君？少し話をしない？」

創「ん？ああ、俺と一緒に受けてたやつか。どうだった？」

晴「僕はまぐれで受かったのかな。あ、僕の名前は楓鷲晴翔だよ。晴って呼んでね。」
創「よろしくな晴。俺は幸平創真だ。いいよな受かって。」

晴「創真君ね。受かるって！創真君も！きつとなにかおかしいんだよ！それに総帥さんがいたから平気じゃないかな。」

創「そうか！じゃ、期待するしかないな！」

晴「じゃ創真君、入学式で会おうね！」

創「おう！」

さあ、入学式が楽しみだ！

第2話 入学式から創真君のせいで大変です。

秋「今日から俺らのところから離れるのか。寂しいけど遠月学園ならお前のためになるからな！」

頑張ってこいよ！」

晴「おう！周りの人の技術を奪いまくってやるぜ！」

今日から遠月茶寮学園に通う事になりました。創真君も合格通知が来たみたいです。

創真君は「あいつ、素直に美味いって言えばいいのに」って朝から愚痴ってます。

僕たちは今、入学式のテントの裏にいます。意気込み？みたいなのを言うらしいです。

創真君はもう決まってる今、壇上にいます。僕は緊張しまくりです。

創「えつと…幸平創真って言います。この学園のことは正直、踏み台としか思っていないです。

思いかけて編入する事になったんですけど、客の前に立ったことのない連中に負ける気は無いっす。まあ、なにが言いたいかと言うと、要するに入っただけからは天辺取るんで。

3年間よろしく願いますー」

創真君の馬鹿野郎！次の僕がやりずらいだろう！あー、もうやりたく無い。

司会者「もう1名の方、どうぞ」

うわー野次飛びまくりだよ。

晴「あ、えつと、楓鷲晴翔つて言います。正直、僕はこんなエリート校に入れるなんて思つてなかつたんですけど、入れたからには頑張りたいと思います。まあ、やるかには遠月十傑には入れるように頑張ります。3年間一緒の人がいれば、よろしくお願ひします。」

はあ、緊張したー。僕に向かつても結構飛んでる気がするよな…気のせいかなあれ、創真君とえりなさんが言い争つてるし、文句言おうかな。

晴「創真君！君のせいで僕、大変だったんだよ！」

え「それにしても堂々としていたはね。いいですか！あなた方は彼らには勝てないんです！」

中等部の3年間を最先端ガストロミーで勉強してきた彼らにはね！」

3年間？勉強とか無駄だろw

もつと遊ぶべきだつてw

創「はじめて包丁を握つたのは3つの時だった。それから12年間俺は調理場で生き

て来たんだぜ？不味いと言われたまま店に泥を塗るわけにはいかねえな。」

創真君はすごいな。僕なんて調理場に立たせてもらえるようになったの4年前なのに……

晴「えりなさん、中学までは遊んでおくべきですよ。最先端ガストロミーを勉強していたとして、その人の料理が美味しいとは限りません。現にみてきましたよね？」

え「見て来ましたが……晴翔君！あなたには無理ね。ま、精々頑張ることね」

いきなり授業ですか……

あ、ラッキー創真君と同じ授業みたいだ。ペアでやるみたいだけど……

緑「お前が俺のペアか。よろしくな。」

うわ、身長高いな。それと、怖い……

晴「う、うん。よろしくね。足は引っ張らないようにするから。」

緑「なに言ってるんだ。あの難切えりなの試験を合格したんだ。自信を持って。晴翔」

晴「あれ？自己紹介したっけ？」

緑「挨拶で言ってるだろ。俺は草楼緑（そうろう みどり）だ。緑でいい。」

晴「よろしくね。緑君。」

おっと、先生入って来たよ。創真君のペアの女の子が死にかけてるような……

シャ「注目。若きアプランティーたちよ。厨房に入った瞬間から美味なる物を作る責任が始まる。それには、経験も立場も関係ない。私の授業ではAを取れない品は全てEと見なす。」

へー。面白い先生じゃないですか。んで、何をつくれと？

シャ「本日のメニューは『ブッフ ブルギニョン』フレンチの定番と言える品だが、一応、レシピは書いておこう。制限時間は2時間。完成した組から出しなさい。では、はじめるとしよう。コマンセ アキユイーラ」

いやー、フランス料理とか知らないな。ここはサポートに回るか。

晴「緑君、僕はサポートでいいかな？」

緑「いいぜ。A評価を取りに行くぞ。」

さあてと、始めますか。

side 料理紹介

煮込み用牛肉を適当なサイズに切って塩コショウを振る

強力粉をまぶして、フライパンにサラダ油とバターを引いて肉を入れる

こんがり色がついたら、取り出す

ニンニクのみじん切りとタマネギの薄切り、ベーコンを鍋に入れる

肉を入れる

具材が完全に見えなくなるまで赤ワインを入れる

強火で煮立ててアクをとる

セロリやパセリなどを加えて肉が柔らかくなるまで弱火で煮込む

煮込んでる合間に、にんじん、マッシュルーム、小タマネギなど、加えたい野菜を適当な大きさに切りフライパンで軽く炒め、塩コショウを振って鍋に加える

弱火でことごと煮込む

お好みの柔らかさになったら完成

お皿に盛り付けて

パセリを散らし、パスタやマッシュポテトなどと一緒に食べると美味しいです。

side out

いやー、結構時間かかるね。あとは煮込むだけですよ。

あれ？創真君のところが何かやられたみたい。先生は試しているのかな？

緑「人の物に手を出すとか、料理人の風上にもおけねえな。」

緑君が、めっちゃ怒ってるよ。怖い…

そろそろ出しに行きますか。

晴「先生、出来ました。どうぞ。」

シャ「ん。楓鷲、草楼ペア 評価A」

よし。評価Aゲット!

晴「緑君、ありがとうね。さすがの腕さばきだよ。負けられないね。」

緑「晴翔の方がすごかったじゃねーか。まだまだ伸びそうで怖いぜ」

晴「僕は夢のために頑張らないとって必死になっただけだよ。」

あ、創真君のペアが出来てる。

シャペル先生が笑ってるよ。すごいな。創真君は。

第3話 極星寮の腕試し 歓迎会その1

晴「創真君も『極星寮』なんだよね？一緒に行くこう！」

授業が終わってから結構時間が経ってるんですけど、見当たる気配がしません。もう、腹減って死にそうですよ。

あ、ああ！あった！やつと見つけたよ。疲れたー

晴「お、お邪魔します。」

うわー古いつて。

ふ「入寮希望の幸平創真と楓鷲晴翔だね？私がここの寮母『大御堂ふみ緒』だよ。

『極星のマリア ふみ緒さん』そう呼びな。」

この人が寮母さんですか。すごいおば…やめとこ。睨まれてるから

ふ「それで、あんたらは何を作るんだい？言つとくけど、食料はあんまりのこつてないよ？」

創真君の顔が大変なことになってるよ。

ん？僕？僕はちゃんと父さんから聞いてたから問題はないよ？

晴「あまりものがあるなら、創真君も大丈夫だよな？」

創「お、おう。問題はないぜ。大御堂ふみ緒殿！少々おまち！」
僕も作りますか

side cook

ボウルの中に卵2個、牛乳1カップ、蜂蜜大さじ1（今回は大さじ2）を入れて泡だてる（本来は泡立て機やると楽です）

パン粉を入れて、水分を吸うまで約5分放置

フライパンにバターを入れて熱し、溶けたら先ほどの物を入れる

中火で2〜3分、こんがり焼いて裏返し

2〜3分焼く

お皿に乗せて、メープルシロップをかけて完成！

side out

創真君はまだなのか。先に僕が出させてもらおうとするよ。

晴「どうぞ。『パン粉のパンケーキ 甘味たっぷり』です。甘すぎたらごめんなさい。」

ふ「パン粉ね…そんなになかった気がするが…食べるとするか。」

パクリ…

ふ「あんだ、いい腕してるね。合格だよ。流石は秋干と未恵の息子だけはあるね。」

晴「ええ！母さんを知ってるの！？なんで！？？」

ふ「答えるのは後になりそうだね。次の料理が来たよ。」

なんで知ってるんだろう？ やっぱり冗談じゃなかったのかな？

でも、お酒飲んでははずなんだけどなく

ふ「あんたも合格だよ。幸平、あんたは303号室、晴翔は305号室だよ。」

晴「やった！ 創真君と同じ階だね！」

創「そうだな。じゃ、俺は風呂に行くぜ！」

この後に、創真君は恵ちゃん達にすごく怒られたらしいです。

慧「編入生くん、おいで、歓迎会だよ。」

そんなことやってくれるんだ。どんな人たちがいるんだろうか

えっと、状況を把握しよう。

僕が入ると、創真くんが正座をさせられていて、その周りに女子生徒が二人いる。

部屋の隅っこに授業で創真君とペアだった子がいて、なんか暗い…

眼鏡かけたインテリ君が起こっていて、その先に男子二人が喧嘩してる。

あ、緑君もこの寮だったんだ。

晴「ねえ、緑君。創真君のことはおいといて、それ以外はいつものことなの？」

緑「ああ、そうだな。あと、2年生の先輩が1人いるがな。」

晴「へえ、そうなんだ。で、創真君は放置で大丈夫？」

創「平気じゃないな。事故だからな。」

助けたら、被害あいそうだな。

晴「創真君？何したの？」

涼「君がもう1人の編入生君だよな？本当に男？女の子にしか見えないんだけど（ボソツ）」

うん。最後の方は聞こえなかった。そうしよう。

晴「そうだよ。楓鷺晴翔って言うんだ。晴翔か晴って、気軽に呼んでね」

涼「私は榊涼子よ。よろしくね。晴君。」

懐かしいなくその呼び方。結構前に呼ばれてた気がするけど、もう思い出せないや。

晴「それで、創真君はなんでこんなことに？」

涼「それはね、恵の裸を見たからなの。」

ええ！創真君やるね〜

涼「心の声がダダ漏れよ。」

晴「え？これは失礼しました。でも、入浴時間については言われてないからしょうが

ないような…」

涼「それは、しょうがないはね…悠姫、離してあげましょう。」

悠「えー、しょうがないなー。はいよ。」

創「ありがとー、晴翔。ふみ緒さんも言ってくればよかったのに。」

晴「創真君が悪いよ。さっさと入ろうとするから、」

創真君は放っておいて

晴「ねえ、緑君。この寮に誰がいるのか教えてくれる？」

緑「おう。まず、俺と涼子、そこで暗くなってるのが田所 恵創真を叱ってたのが吉

野 悠姫。眼鏡かけてるのが丸井 善二。喧嘩してる黒髪が青木 大吾。金髪の方が

佐藤 昭二。んで、前髪で目が隠れてるのが伊武崎 俊。

あと、あそこで創真と話してるのが、極星寮の唯一の2年生で遠月十傑第七席一色

慧先輩。こんなところか」

晴「へえ、いろんな人がいるんだね。遠月十傑の第七席の先輩か…慧先輩の料理食べ
てみたいね。」

緑「ものすごく美味いぞ。次元が違うくらいな。」

晴「それって、緑君よりも？」

緑「まあな。先輩に勝てる料理思いつかねー。」

緑君にすら、そんなことを言わせちゃうのか。是非とも料理技術を見てみたいものだ

ね。

遠月十傑か： 入学式に入るとか言っちゃったけど、本当に入れるのかな
みんながこれほどまでも実力で、その上に縁君やえりなさんがいるのに：
確かに、父さんと母さんがここに連れてきた意味がよく分かったよ。

第4話 歓迎会その2

創「十傑って、なんなの？」

晴「創真君、何も知らないで入ってきたの？」

この学校のこと、本当に何も知らないで入ってきたんだ：

晴「善二君、説明してくれない？」

善「なんで僕が：しようがないな。『遠月十傑評議会』それは、学内評価上位10名の生徒達によって組織される委員会だ。遠月では多くの委員会が生徒の自治に委ねられ、あらゆる議題が遠月十傑によって合議される。まさに学園の最高意思決定機関。学園の組織図では総帥の直下であり、講師陣ですら十傑の総意には従えざるを得ない。」

悠「何十年も昔、寮の部屋が満室だった頃、極星寮から十傑が出まくってたんだってさ」

涼「十傑の全てを極星寮が取っていた年もあったそうね。」

へー、そんな年もあったんだ。

善「そのなかでも、第68期の卒業生徒第1席『遊蘭未恵』、同期第2席の『楓鷺秋千』がすごいんだ！」

すごい人がいたもんだね。うん？なんか知ったような名前が……ってか、

晴「僕の父さんと母さんじゃん！」

涼「ええ！未恵先輩と秋干先輩の息子さんだったの!!？」

晴「そうだよ。うん、そうだと思います。だから母さんはあんなにもすごかったんだ。」

大・昭「持ってきたぞ〜」

あれ、創真君の目の前にだれか：

慧「君が創真君だね？歓迎するよ。僕は2年の『一色慧』だ。一色先輩とそう呼んでくれ。」

あれが現十傑の慧先輩か。爽やかな人だな。

慧「君が楓鷺晴翔君かな？もしかして、遊蘭先輩と秋干先輩の息子さんかな？」

晴「そうですよ、慧先輩。これから、よろしくお願いします。」

慧「晴翔君にはすごく期待してるから頑張つて。」

晴「慧先輩、プレッシャーがすごく重いですよ。そんなことを現十傑第七席に言われたら」

慧「ごめんよ。でも、本当に期待はしてるからね」

これでまた、頑張る理由ができてしまったよ。

慧「僕は嬉しいよ。寮に入る人が2人増えたんだ。同じ屋根の下で同じ釜を食う。これぞ青春、これぞ学生。僕はこれに憧れて寮に入ったんだ。」

慧先輩、そんな理由で寮を選んだんだ。

涼「晴君、これ飲みな？」

晴「ありがとう、涼子ちゃん。つて、これお酒？」

涼「いいえ、違うわよ。ただのお米のジュースよ。」

なら、大丈夫か。

創「なんつうか、この寮は変人ばっかだな。」

創真君の言い分はわかるぞ。恵ちゃんにずっと言ってくる先輩とか、うるさくしても何も言わないふみ緒さんも。ついでに創真君も

でも、みんなが面白いのも事実なんだよね。ここなら料理を極められそうだしね。

慧「みんな、ジュースはもったね？では、幸平創真君と楓鷲晴翔君の前途に、極星寮の栄光に乾杯！」

晴「すごいな。創真君は一瞬で馴染んじゃってるよ」

緑「いや、お前も十分に馴染んでるだろ？」

晴「当たり前だよ。だってみんなのノリがいいんだもん」

伊武崎君は燻製が得意なんだな。すごく美味しい。

大吾君と昭二君はいいライバルみたいな感じなんだ。

悠姫ちゃんの弄られ具合の度が若干すぎてる気もするけど…

創真君は失敗作出してるよ。うわ、不味そー

慧先輩はなぜか裸エプロンになってるよ?!?え…本当に第七席なの?大丈夫かな…

緑君は…駄目だ…創真君の失敗作にやられてる…

第5話 歓迎会その3

慧「料理なくなつたね。鯖があつたから、僕が何か作つてきたあげよう。」

慧「できたよ。『鯖の山椒焼きピュール添え』だよ。」

う、美味すぎる！これが第七席の実力か…

でも、まだ、本気じゃない気がする。

慧「改めて自己紹介しよう。『遠月十傑第七席』一色慧だ。次は創真君か晴翔君の料理を食べてみたいな。」

晴「僕は遠慮しておきます。」

創「俺はやりますよ！俺も鯖を使います。」

創真君は何作るんだろうな〜

晴「慧先輩はなんで創真君に勝負をふっかけたんですか？」

慧「ふっかけたんじゃないって。ただ、気になったからね。」

どう考えても怪しいよな。まあ、いいか

創「出来ました！『幸平裏メニユーその20改、鯖のお茶漬け』だ！」

うわー、おいしそー

「いただきます。」

これは、美味い！さすが創真君だ。芽生えてきたよ！

慧「これは『ポワレ』が使われているね、どこでこんな技法を？」

創・涼・悠「ポワレ？」

緑「なんで創真がしらえーんだよ。」

創「いや、親父がこうした方がいいって教えたから」

晴「ポワレですか。フランス料理におけるソテーの一種ですよね。」

慧「そうだよ。素材の上からオリーブオイルなどをかけて均一に焼き色をつける技法だね。」

なんでこれを？」

創「親父が海外飛び回ってるんで、知ってるんじゃないですかね。」

晴「僕の父さんみたいな人だね。実は遠月の卒業生のだったりして？」

創「いや、わかんねーな。」

慧「素晴らしい雪解けだったよ。創真君」

創「先輩こそ、最高の春風でした。」

裸エプロンと常識の格好が涙目で握手してるよ。絵図は最悪だね…

悠「よし、解散だ。」

慧「晴翔君、おはよう。着替えて畑に来てくれるかな」

極星寮って畑があるんだね。

晴「慧先輩、禪ですか。」

創「似合う！」

気のせいだ…

恵「創真君！ほら、一色先輩が育てた野菜。美味しそうでしょ？」

創・悠・晴・緑「ホツとする似合い方だな。」

創「ん？研究会？」

それは僕も聞きたいな

悠「例えば、放課後、みんなで料理を研究したり」

涼「学外のコンテストに参加したりするの」

慧「普通の学校で言えば、部活動みたいなものかな」

恵「私は郷土料理研究会に入ってるんだ」

創「へーいろんな研究会があるんだ。あ、『井物研究会』行ってみようぜ！田所！晴翔

！」

晴 「ごめんね創真君。僕は別の研究会に興味を持ったからそっちに行くね。」

創 「それはしゃーねーな。じゃ、行ってくるわ。」

晴 「行つてらっしゃい。創真君、恵ちゃん。」

2人ともお似合いな気がするな

さあ、僕も行きまするかね。

第6話 研究会に入りますか？

コンコン

晴「失礼します。1年の楓鷺晴翔です。この研究会に興味があつて来ました。」
すごいな。見たことのない料理器具？みたいなのがいっぱいあるよ。

紅「あら、いらつしやい。転入生君。『最先端研究会』へようこそ。ごめんなさいね。
主将はまだ来てないの。私でよければ話を聞くわよ、転入生君」
綺麗な人だな。

晴「『最先端研究会』の『最先端』とは料理で使えるものなのかと興味をそそつたので
来ました。それと、『転入生』はやめてください。」

紅「あら、ごめんなさいね。晴翔くんがいいわよね。」
晴「大丈夫です。」

紅「それで、最先端のことね。『最先端技術』の発達で電子機器が出来たの。それで世
界は変わったのよ。そして、細胞などの研究が進みました。なら、それを料理に組み込
みましようってことで『雑切インターナショナル』が出来たの。その娘さんでこの部
長の『雑切アリス』さんが研究会を作ったのよ。」

晴 「つまり、細胞まで味付けをして、味わってもらおうってことですね。しかも、主将がえりなさんと同じ名字とは。」

紅 「えりなさんとは従姉妹らしいわよ。まあ、えりなさんとは性格は全然違うけどね。ま、最先端の料理が知りたいなら味わうべきよね。ちよつと待ってて、作ってあげるから。」

晴 「よろしくお願いします。」

最先端の料理か…

どんなものがくるか、調理を見ても分からないし、機器の説明もされてないんだよね。

ア 「やっぱり、いつ見ても紅音の料理姿は美しいわね！リョウくん。」

リ 「…そうっすね…」

紅 「できました。食べてみてください。それと、アリスさん、リョウさん。お疲れ様です。」

ん？普通のゆで卵に見えるのは、もしかして僕だけ？

晴 「いただきます。」

これは！美味しい！なに、普通のじゃないのか。これが最先端の料理ですか。三段階の味が変わっている！

晴 「すごく美味しいです。どうやってこのような品を？」

紅「普通に作った後に『上段』『中段』『下段』で味を変えたのよ。どう？これが最先端の料理よ？」

晴「素晴らしいです。これを作って見たいです！」

紅「私的には大歓迎なんだけどね、アリスさん、晴翔くんをこの研究会に入れますか？」

ア「いいんじゃないかしら？えりなの試験に合格したんだから！そういうえば晴翔君、えりなは『美味しいっていったの？君の料理に』

晴「入れてくれるんですか？！？ありがとうございます。アリスさん！えりなさんにはそんなこと言われてないです…でも！いつか！言わせないといけないんです！夢のため！」

ア「歓迎するわよ、『最先端研究会』に。まあ、えりなは言わないわよね。みんなでえりなを倒しましょう！いいわね？紅音！リョウくん！晴翔君！」

「はいー！」

晴「改めて、自己紹介させてもらいます。楓鷲晴翔です。知つての通り今年に編入してきました。ここで、自分の技術高めるために頑張ります！よろしくお願ひします！」

紅「じゃあ、最初にアリスさんとリョウくんの料理勝負審査委員でもしましょうか！つものことからね。」

晴「いつものことなんですか…すごく贅沢なような気がしますけど…」

紅「ん？晴翔くんはもう2人の實力を知ってるの？」

晴「まあ、一応調べてますので。まあ、時間はかかりましたけどね。」

紅「もしかして、全員？」

晴「いや、まだまだ全然です。名前が出てる人はある程度分かるくらいですよ。」

紅「それだけでもすごいよ。」

晴「情報収集は基本じゃないですか？」

紅「まあ、そうなんだけど…あ、料理が来たよ」

おお…2人とも美味しそうだ。

パクリ

んんっめちやくちや美味しいじゃないですか！僕だけレベルが全然違うな…頑張らないと

なやみます。なやみますけど…

晴「この料理対決の勝者は、リヨウくんです！」

ア「また負けたー！リヨウくん！次は負けないからね！ふん！」

紅「また負けましたねー。あらら、ほら、晴翔くんなだめて来て」

晴「僕のせいですか？」

紅「君のせいでもあります。」

晴「はあく。あのくアリスさん？アリスさんも美味しかったですよ？」

ア「なによ！でも、リョウくんに負けたじゃない！」

晴「それは、時間帯とかに関係がありますかね。審査委員がいつも空腹なわけではないですし、好みがありますから。次は審査委員のこともかんがえましょう？」

ギユ、

ん？なにが、ん!!？

晴「あ、あのく？な、なんでアリスさんは、抱きついてるんですか？それからm紅音さんはニヤニヤしてないで、助けてください！いろいろとやばいです！」

ア「懐かしい感じがするんだもん！」

紅「いやー、青春してるなうって思っ、ねえ？リョウくん？」

リ「…そうっすね…」

懐かしいって、確かにこんなことが昔にもあつた気がするけど…

晴「ってか、2人はひどいですね！」

第7話 晴翔の幼少期と記憶

『アリス』さんで思い出しました。

僕が小学生だった頃です。

家族で海外に2年間滞在をした時がありました。

父さんと母さんが友達の手伝いで滞在を僕は家族としてました。

その名前は『雑切インターナショナル』分子ガストロミーの研究所です。

もう、その頃のはリョウくんのアリスさんが仲良く？なっていました。

初めて会ったのは研究所の調理室です。

母さんが僕を連れて調理室に案内をしました。

調理室に近づいて行くに連れて聞こえて来たのは料理している音でした。

中に入ると僕と同じ年くらい？の男の子と、肌と髪が白い女の子が料理をしていました。

その頃のは僕は料理の修行をしていましたが、2人とはレベルが全然違いました。

side 幼少期晴翔

母さんに連れられて外国に来てから1週間が経ちました。今日からここにいます。

料理の勉強ができません。はやくしたくてたまらないです。

調理室から聞こえてくるのは調理している音が聞こえました。

母さんが「中に入ろう?」と言って来ました。

入ってみると、料理をしているのは僕と同年くらいの子たちでした。

晴「母さん? 今日からってことはこの人たちとやるってことなんだよね?」

未「そうよ。教えるのは私だけだね。」

2人ともレベルが違うな。まだまだ成長しないとな。

未「リヨウ君、アリスちゃん。今日からよろしくね。」

晴「母さんと一緒に来ました。楓鷲晴翔です。よろしくお願いします。」

ア「晴くんね! よろしくね! 私は雑切アリスよ! で、そこにいるのが私の側近の黒木場リヨウよ! ほら、リヨウくん挨拶!」

リ「:うつす。リヨウだ。よろしく:」

晴「アリスちゃんにリヨウくんだね! これからよろしくね。」

それから2年間の時が流れました。

僕たちは今日で日本に戻ります。すごく悲しいです。

晴「アリス! リヨウ! また会えるよね? 次会うときは絶対に勝つか! 約束だよ!」

ア「そうよ！次に会っても絶対に負けないんだから！だから、またね！晴くん！」

リ「晴！絶対にレベルを上げて俺らのとこに来い！それまでお別れだ！」

晴「おう！じゃ、またな！」

side out

そうだよ！思い出したよ！アリスちゃんとりヨウじゃん！また会えたからよかった。忘れてたのはあれだ！帰って来てから交通事故に会ったからだ。全部思い出したよ。さあ、これからが僕の物語になるのかな

晴「ただいま」

ふ「晴翔、雰囲気が変わったね？おかえり」

晴「やつぱりわかっちゃいます？記憶喪失を奪還したんですよ！これで、美味しい料理を作れるぜ！」

ふ「それはよかったね」

晴「みんな、ごめんね。急に呼び出したりしちやって。」

善「だから、なんで僕の部屋なんだ！」

晴「実は僕は記憶喪失だったんだよね。ま、研究会見たら思い出したんだよね。これからは前みたいな感じじゃ無くなるけどごめんね。」

全員が?になってる。ってゆうか…

晴「そういえば、創真と恵ちゃんはどうした?」

悠「あ、そうだよ!幸平が井研代表としてあの、『水戸郁美』と食戟をするらしいの!

しかも、幸平は退学をかけて!」

晴「へー、『食戟』か…創真も大胆だね。ま、勝つだろうな」

創真が負けるわけないもん。

緑「晴翔の可愛げがなくなつた…だと…!」

晴「いやいや、男としていらねーだろ。」

思いつきり項垂れてるよ…:どんだけシヨックなんですか!?!?

第8話 創真の食戟と地獄の合宿？

あれから、知り合いのみんなには全てを話しました。

アリスとリヨウはしっかりと覚えたらしくて、ものすごく怒られました。

2人とは料理対決をしましたよ。まあ、負けたんですけどね…

んー、2人ともさらにレベルが上がってたな。

そういえば、今日は創真が水戸郁美と食戟らしいんです。

と、言うわけで、最先端研究会のみんなで見に来ております。

紅「編入生君と郁美さんの食戟ですか…郁美さんが勝ちそうなきがするのは、私だけでしようか？」

晴「郁美さんって肉がよければいいって考え方してるんだよね。そんなんじゃないだろうあがいても、今回の食戟は勝てないと思うな。『丼』ってゆうのはお椀の全てで完成だから」

ア「晴くんが言うんじゃないかしら！」

リ「実績のない奴よりも実績がある水戸が勝つ、と思ってる奴の方が多いだろうな。」
晴「みんなは認めたくないんだろうな。創真ほど努力をしているのを俺は知らねーな。」

ア「私たちが努力していないと言うの!?!?」

晴「そうとは言っていないよ。ただ、俺らみたいな対応じゃない人は認めないってことだな。」

紅「それほどなのですか？彼は」

晴「たぶん、食戟受けると言った日から1日2時間寝るくらいじゃねえかな」
ま、それが創真の強みではあるよな。

晴「やっぱり創真の勝つか。これで水戸はえりなちゃんから見捨てられたな」
紅「すごいことになったわね。あんな肉で水戸さんをやぶるとは」

ア「えりなにみんなは縋りすぎなのよ！ね！晴くん！」

晴「まあ、上がいるのはいいことなんじゃねーか？倒す目標がいるんだから」
さ、俺はいつになったら遠月十傑に入れるかな

晴「あ、そうだ！アリス、リヨウ、紅。今日も料理対決しようぜ」

紅「懲りない人ですね。今日こそはアリスさんとリヨウくん勝ちます！」

ア「リヨウくんなんかには負けないんだから！」

リ「今日も俺が1番だ！」

晴「え、僕が最下位になること確定なのかよ！」

これがいつもの日常です。

極星寮に帰って来たよ。え？料理対決？今回は紅に勝てたよアリスとリヨウにはまだ勝てねーよ。

なんか合宿やるらしいんだよね。

慧「僕の代でも、毎日何十人と退学にされていたよ。」

雑魚は落とされるのか。恵はこの世の終わりみたいになってんな。

晴「てか、いつでも半分くらいしか落とされないんだろ？だったら、みんなで合格すりゃいいんだよ。」

悠「いいこと言う！そうだよ！みんなで合格しちゃって帰ってこよう！」

「おうー」

晴「でも、創真是遊ぶ気満々だな。」

創「おう！こんなところで落ちられっかよ！」

晴「じゃ、みんなの生存確認と遊びのために、夜は善二の部屋なー」

善「だからなんでいつも僕の部屋なんだ！」

知らん！ま、気にしないでっど：

今回の合宿でどこまで技術が上がるかどうかだな。残る人もそれなりに実力があ
るってことだな。ちょっと目星をつけて仲良くしようっど。

合宿当日

緑「晴翔、寝不足か？」

晴「ああ、楽しみで眠れなかったわ。」

皆「あ、子供だ。」

晴「着いたら教えて。寝る」

緑「わかった。」

side 夢

銀「久しぶりです。未恵さん、秋さん。そこにいるのは息子さんですか？」

秋「久しぶりだな！銀！お前はここに就職したのか。今後の遠月の後輩たちの品定めはちゃんとしろよ？」

未「お久しぶりね。この子は私たちの子供よ。名前は『晴翔』よ。私たちの城を継ぎ足い。っていつた時に中学生だったら、よろしくね？それと、これからは私たちも卒業生として合宿に出るから。」

銀「おお！今後の合宿がさらに楽しくなりそうです。あの、『カエデ』のお二人が来たとなつちや、我々も楽しいですから。それと、息子さんって、城一郎の息子と同一年ではないですか」

未「あら、そうなのね。その代は楽しそうね。総帥のお孫さん2人とも同い年でもあ
るのよね。」

秋「水戸グループの娘さんも同い年らしいぞ。」

銀「これは楽しみですな！」

――――
緑「着いたぞ？晴翔」

晴「んー？ああ、ありがとう、緑。」

なんの夢だったんだろうな。ま、いっか。

つて、でけー！さすが金持ちだな！

善「十数件もの宿を『遠月リゾート』つて名前でやっているんだ。」

俊「普通に止まったら、1泊八万かららしいぞ。」

晴「創真、驚きすぎだぞ。」

1000人くらいの方がここにいるんだよな。静かだな

創真も水戸に話しかけてるから、アリスにとこに行こ

晴「やつほー。アリス、リヨウ、紅。もちろん、余裕だよな？」

ア「そんなことも確認しに来たの？私たちは余裕に決まってるのよ！」

紅「その通りです。研究会でクリアは余裕だと思いますので、夜は遊びましょう。」

晴「紅ってさ、意外と子供なんだね?」

紅「n、なにを?あなたが1番子供っぽいでしょう。身長的に」

晴「そうやって、僕の辛いことを指摘しないでよ。どうせ子供ですよ!」

周りの生徒「こんな子供、いてたまるか!」

シヤ「今回の合宿では、卒業生が来てくれるか。」

卒業まで行けた、すごい人たちか。

あ、創真の横の人が退学にさせられた。

善「君は知らないのか!日本人で初めてフランスのプルスポール勲章を受賞した四ノ宮シエフだよ!しかもあそこには、『エフ』の水原シエフ。あつちは寿司店『銀座ひのわ』の関守板長も!」

緑「しかも、あれは!世界の中で1番美味しいと言われてる定食屋『カエデ』の秋干さんと未恵さんまでいる!」

晴「すごい人たちが遠月の卒業生なんだ。つて、父さんと母さんいるの!??しかも、うちの定食屋が世界で1番だと!??」

ああ、僕はそんなにすごいところで『副料理長』兼新しい料理人との対決役をやらされてたの!??

あ。母さんがこつち向いて笑顔で手を振って来てるよ。やべえ、合宿始まる前に辛い

んだけどw

そんなことをしているうちに恵が勧誘受けてるし、父さんは近くにきたよ。

秋「どうだ？晴翔。遠月は楽しいか？」

晴「父さん。楽しいよ？アリスとリヨウに再会したし、僕よりも料理が上手い人も多い。それと、食戟は面白いだろうね。でも、なんで僕はあそこで『副料理長』だったの？涼くんの方がすごかった気がするのに」

全員「ええ！お前が副料理長だったの！？？」

え「晴翔君？あなたが楓鷲様夫妻の息子さんで、『カエデ』の副料理長なのって、本当なの？」

晴「本当ですよ？でも、そんなにすごいと思っていませんでしたけど？」

未「秋さん！言ってなかったんですか？それから、はやく戻ってください！」

秋「あ、ヤツベこれは殺されるなwじゃ、お前ら頑張れよ！」

地獄の合宿

第9話 地獄の合宿1日目 1

この合宿の内容をざっくり言うと、

- ① 料理をずっとする。
- ② 卒業生の店の従業員らしきものになる。
- ③ 期待に応えられなきや速攻退学。
- ④ 頑張れ！
ってことらしいな。

僕たちはえっと、創真と恵と縁と同じとこだな。

卒業生は『霧のや』の日向子先輩だね。

日「はい、皆さん。私はここに座ってますので、分からないことがあったら聞いてくださいね。」

いやいや、なんもきいてねえぞ？

モブ「あの、乾シェフ。何にも聞いてないんですが？」

日「あー、そうでしたか。ええっと、私が出すのは、ここにあるもので日本料理のメ

インになるものを作ることです。」

あー、コリヤ楽しそうな課題だ。視野は狭くなるし、魚料理ばっかしになるな。

日「柵を越えたらその時点で失格。私を満足させられたら合格です。制限時間は2時間。それでは、よいいはじめ。」

みんなが走っていくー

タ「どちらが美味か、厳正なる審査を！」

何やってんだか…笑えるw

晴「タクミ・アルディーニ二つ言ったつけ？滑稽な姿だねw言っとくけど、僕も本場でやってたからな？」

タ「う、うるさい！いいか、君たちには負けないからな！幸平！あと、そのちびつ

こもー！」

晴「よし。テメーだけは絶対に潰す！」

緑「おい、やめとけ。いくぞ。」

晴「当たり前だ…創真と恵！後でな」

さあ、材料も揃ったし始めるか。

あ、タクミだ。

創「厳正なる審査を！」

晴「創真！wwww」

タ「な、やめろ！って、幸平も魚なのか。」

晴「やっぱりみんな、魚料理にしてるのか。視野を広く持つてみたらどうなの？タクミみたいに」

タ「そうだ！和食だからと、魚料理以外にもあるだろうに。俺が使うのは合鴨だ！敷地内には兎や鶏だっていたぞ」

晴「タクミはよく見ているな。俺らは兎なんだよねー」

モブ「嘘だ。でも、料理なんかしたことないし…」

晴「んじゃ、兎の方は任せたぞ。緑」

緑「了解」

モブ「な、なんだ！あの速さは！しかも、内臓を全く傷つけてない！」

晴「んっしょっと。緑、タレの準備は終わったぞ。」

緑「こつちも終わったぞ。」

晴「さあ、ファイナーレといこうか！」

タレをかけて完成なのだ！

晴「日向子先輩、俺らの作った『ジンギスカン 俺らの出会い鍋』です。名前のセン

スは気にせずにご食べてください」

日「んん。美味しいです。視野が広くしっかりと持ちましたね。草楼・楓鷲ペア、合格です。」

晴・緑「スパシーバ！」

夕「次は僕たちの番だ！『合鴨の香り焼き 緑のソースを添えて』ボナペティート」
あそこまで綺麗に合鴨ができるのか。それに、しっかりとした名前をつけてやがるよ

：

日「合鴨とサルサベルデ、それぞれに和風のエッセンスを散りばめて見事に日本料理としてできています。『タクミ・アルディーニ』『イサミ・アルディーニ』合格とします。」

夕・イ「グラツツエ！」

モブ「は、速すぎる！鴨を捌くヒマもあつたのに……」

晴「さすがだな。俺らに喧嘩を売るだけの實力はあるんじゃないやねーの？」

緑「それでも、まだ弱いな。俺らには勝てない」

創「さすがにそれは言い過ぎじゃないやねーか？俺がそんなもん超えてやるよ。行くぞ
田所。」

恵「は、はい！」

第10話 地獄の合宿1日目 2

晴「へー、創真もおもしろーもん考えるじゃん。」

緑「創造は豊かなのかもな」

夕「それでも、俺は負けない！」

晴「それは、言い過ぎなんじゃないかな？この辺にいる奴らとは違うんだからさ」

夕「それは同意するな。」

楽しみだな。

みんな落ちてますね

創真はやつと来たか。

夕「遅い！俺と戦わずに退学になるつもりか！」

創「あと、15分もあるじゃねーか。かかるぜ田所！」

へーこれは、衣揚げかな？衣は柿の種つてどこか

タクミも分かったか。まあ、そりや分かるよな。

創「どうぞ。乾先輩、おあがりよ」

日「わー！私の柿の種が綺麗な揚げ衣に！」

晴「さすが、と言ったところか。揚げ衣なんて普通は出てこないんだけどな」

創「名付けて、『幸平流 岩魚のお柿揚げだよ！』」

夕「絶対、今思いついただろ！」

創「計算通り」

晴「無茶言うな。思いつきだ」

日「幸平 創真 田所 恵 合格とします。」

創「お粗末様！」

日「はい。そこまで。課題はここで終了です」

夕「乾シエフ、勝負の判定をお願いします。」

日「よろしい。勝者は、誰も思いつかない食感で岩魚を見事に仕上げた：ちよつと待ってください。道の状況でも合鴨とゆう選択肢を見逃さず、食材選びに差をつけた：いや、でもやっぱり。独特の名前のセンスを持ち、北海道のジンギスカン鍋できた：やっぱり、待ってください！」

小「何やってんだ、日向子。お前のとこ、もう戻らせる時間だろ」

日「皆さん、急いでバスに乗ってください」

創「乾先輩、判定は？」

日「この勝負、私が預かせてもらいます」

夕「いいか、幸平！いつかこの決着は絶対につけるぞ！」

創「いいけど、どうやって？」

夕「いずれ君に食戟を申し込む。逃げるなよ。必ず受ける。その時こそ、君をペシャンコにする。それまで、精々腕を磨いておくことだな。また会おう、幸平創真。」

創「なあ、おい。また会ったな！」

夕「うるさい！話しかけるな！」

何やってんだか：

創「どうした？ペシャンコにしねーの？」

晴「タクミ、忘れてるようだが、お前は俺らに負けるんだぞ？」

夕「は！忘れてた！」

――――
おし、初日は極星全員生き残ったか。アリスとリョウと紅音も平気っぽいな。

平「彼らの夕食を完成させたものから、自由時間とする。今日の夕食、『牛肉ステーキ御膳』だ。各自50食作ってもらう。終わったものから自分で賄いを作り、済ませなさい。朝食、夕食は各自で用意だ。それから、60分以内にできなかつたものは、退学と

する。」

んー？余裕かな？

平「楓鷺 晴翔 50食戟達成。」

晴「ま、余裕かな。みんな頑張れ。」

暇だし、先に風呂入ろーっと。

ありや、目の前にいるの、えりなちゃんじゃないですか

晴「あれ？えりなちゃん？こんなに早く終わるなんて明日が十傑だね〜」

え「な！楓鷺くん？あなた、こんなにはやく終わったの？ギリギリで編入したあなたが？」

晴「その頃の僕とは全然違うからね？って、アリスはまだ終わってないのか…」

え「あの時と違うのかしら？あなたが副料理長だったってことには驚きましたけど…」

晴「ま、今なら美味しいと言わせられるぜ？そのことは、僕も驚いてるけどね。んじや、バイバイ」

へー、えりなちゃんでごんくらの速さなのか。十傑の座を取れるんじやね？もう少し勉強するけどね

緑「晴翔、お前ははやいな。」

晴「緑だつてはやいじゃないか？ 風呂行こうぜ」

緑「おう、風呂は楽しみだ」

晴「ほんと、それ！ 綺麗なんだろうな。」

楽しみなんだな」

晴「ありや、先客がいるっばいぞ？ 生徒ではないけど…」

緑「あれつて、堂島シエフじゃないか？」

銀「おや、もう来てしまったか。しかも、2人か92期生は素晴らしいな。」

晴「銀先輩でしたか。銀先輩から見て、俺の父さんと母さんはどんな人でした？」

銀「未恵さんと秋さんか。素晴らしい先輩だったな。2人に1度も俺と城一郎は勝てなかつた。でも、そのおかげで競い合う人ができた。」

晴「そうですか。そんなに俺の父さんと母さんはすごかつたのか。負けらんねーな」

緑「俺も、お前に負けなくらいになつてやるよ。」

銀「は！ 昔の俺たちを見ているようだ！ 挫けるなよ！」

晴「こんなところで挫けてたら、定食屋は継げねーな」

ガラ

創「晴翔！ 緑！ お前ら速すぎんだろ！ つて、だれ！？？」

晴「創真、遅いんじゃないか？」

緑「堂島シエフだよ。ここの料理長兼取締役の」

創「堂島先輩ですか」

銀「3人目も来てしまったか。そろそろ私は出るとしよう」

ガラ!

夕「幸平!遅れをとつたが、負けてはないぞ!俺の方が味は上だ!あ、こんばんは。堂

島シエフ。」

銀「君たちは青春を謳歌したまえ」

幸平:その名前、どこかで:

晴「よう、タクミ。ずいぶんと遅い出勤じゃないか?」

夕「な!楓鷲!それと、草楼!お前ら、いつから!」

晴「んと、えりなちゃんが終わった頃くらい?」

緑「その、ちよつと後くらいだな」

創「雑切と同じだと?速すぎんだろ。あいつ、もう出てたぞ」

晴「俺が長風呂好きだから、しょうがないな。終わったら善二の部屋だろ?俺はよる

ところあるから遅くなるぞ。出るとするかな」

緑「じゃあな、晴翔。創真と善二の部屋で待ってるから。」

晴「おうよ!待ってるよ」

さあ、あいつのどこに行くとするかな

第11話 地獄の合宿1日目 3

晴「アリス、リヨウ、紅音、お疲れ。みんな落ちなかつたか。」

ア「あんな程度で落ちませんよ！」

リ「あんなのただただこなすだけだ。」

紅「できる人を見られただけで、良かったですよ。」

晴「あー、それはあるよな。」

例えば、アルディーニ兄弟とかな。

紅「そういえばみなさん。この後はどうするんですか？」

晴「極星寮のみんなで遊ぶ。」

ア「リヨウくんを連れて、えりなのところかな？晴くんも連れて来く！」

紅「では、私もついていきますね。」

アリスたちはえりなちゃんの所に行くのか…

ん？ちよつと待て

晴「おい、アリス。なんで僕もそこに入ってるの？僕言つたよ？極星寮の方行くつて」

ア「遅れても大丈夫でしょ？はい、行くつたら行くの！」

リ「こうなったら、お嬢は止められない…」

マジか？アリスと入られるからいいんだけど？

晴「はいはい。行けばいいんでしょ！でも、あの秘書の人と話したことないんだよな

」

紅「晴翔くんなら、平気ですから、いきますよ。」

リヨウに首根っこ捕まえられてるんだけど…

え？はあ？！？なんで？！？

晴「リヨウ！なんで首根っこ掴んでんだよ！」

リ「…こつちの方が持ちやすいって、お嬢が言ってた…」

お嬢様、大丈夫か？

晴「アリス？これ、どうにかしろよ！」

ア「無理ね♪」

おいおい。絶対に楽しんでやがる。

緑「晴翔はまだ来ないのか？」

創「なんか、誰かに会いに行くって言ってたよな。」

善「そんなことはいいいから、僕は寝たいんだ。はやく出て言ってくれ。」

ア「えりな！久しぶりね！」

え「アリスね。ええ、久しぶり。ところで、黒木場くんはいいとして、その2人を連れてくるのは初めてじゃない？」

ア「そうだったわね！私と同じ、『最先端研究会』の紅音と晴くんだよ！」

紅「はじめまして、えりなさん。リョウくんの幼馴染みの白咲 紅音です。」

晴「さつきぶり？だね、えりなちゃん。実は最先端研究会に入ったんだ。今日は来るつもりじゃなかったのに、強制連行されました……」

え「あなたも大変ね……アリス、何の用で私のところに来たの？」

ア「みんなの紹介と、えりなと秘書子ちゃんを遊びに誘おうかと思って！」

緋「秘書子じゃありません！それから、えりな様は忙しいのです！」

晴「できる秘書で側近だな。リョウとは大違いだ。」

リ「おい、晴翔！喧嘩売ってんのか？」

晴「おう、そうだよ！まかないまだ作ってないから、どっちの方がうまくできるか勝負しようぜ！」

リ「ぜってえ叩き潰す！」

紅「2人共……アリスさん。帰りましようか。」

ア「じゃあね、えりな！」

え「ええ。」

晴「悪い。遅くなった。」

緑「やつと来たか。」

善「かえれー！僕は寝たいんだ！」

晴「よし。勝負だ！」

この日は3時まで善二の部屋にいたよ。途中でみんながどんどん倒れて行って、最終的に、僕と創真と緑だけ生き残っていたんだよ。

晴「緑、創真。こっから、生きていけるか？」

創「いけるな。余裕だ！」

緑「いけるけど、先輩によっちゃ体力消耗して行くから、キツくなって来るだろうな。」

晴「そうだよな。次に僕の父さんとあたりそうで、怖いんだよね。」

緑「あー、朝から走り込みだろうな。」

晴「ま、余裕だけどね。じゃ、部屋で寝るわ。お休み。」

第12話 地獄の合宿2日目 1

秋「よし、お前ら。今日1日の担当の楓鷲 秋千だ。料理については午後見るからな。とりあえず、12時までには、宿泊所まで来い。それと、俺よりも遅いやつはその時点で退学とするぞ。では、よいいどん！」

モブ「え？」

秋「はやくしないと、全員退学になるぞ」

モブ「ええー！いそげ！」

「でも、普通にいったら体力ないから無理だって」

えつと、父さんもひどいことするよね。同じ会場の人は、と。

晴「緑、アリス、リヨウか。ま、落ちることはないかな？」

緑「余裕だな。」

晴「じゃ、行こうぜ」

アリスが行けるかどうか不安だけど…

晴「リヨウは、本当に力持ちだよな。アリスは父さんが言ったこと理解してるっぽいし。」

ア「ほら、リヨウくん！頑張りなさい！」

リ「晴翔！お前には負けねーぞ！」

晴「安心しろ。父さんと話しながら行くだけだから。」

つて言つてたら、父さんが見えて来たよ。

晴「おーい！父さんー！」

秋「なんだ、晴翔か。それと、極星寮の緑と薙切のアリスと側近のリヨウか。」

緑「秋干先輩、お久しぶりです。先輩の試験を受けられて嬉しいです。」

ア「晴くんのお父さんなのね！よろしくお願いします！」

リ「…うつす…」

晴「なんで、父さんはこんなのを試験に出してんの！8割の人は潰れるよね？」

秋「みんな、晴翔をよろしくな。理由は自分の城を持つたらわかることさ。」

緑「体力が持たなくて、常に最高の料理が出来なくなるんですね。」

秋「緑はわかってんじやねーか。んで、アリスは穴にきずいたのか。でも、リヨウは

楽そうだな。」

リ「そんな、やわな鍛え方はしてねー」

晴「今日の最高にすごい料理ができるのは、僕たちだけだと思ふな。」

秋「なんだ？お前がその中に入ってるわけないだろ？」

晴「父さん？僕は記憶を取り戻したよ？」

秋「ま、マジか？！？よっしゃ！未恵に伝えねえとな！今日は勝負だ！」

晴「当たり前だ！絶対に負けないから！」

午後なつたよ？えつと、残ってるのが…10人？！？少なくねーか？

秋「おいおい、92期生は大丈夫か？去年は全日程俺が担当したのは、午前中で20人は残っていたのに…」

みんな、体力がなさすぎない？精々、18キロくらいだよ？あ、意外とあつたか。

秋「んじや、午後の会始めるとしようか。材料は用意してあるのは分かると思うから、定食屋で出せる様な料理を出してくれ。」

これ、僕、余裕じゃないですか？

秋「では、始めるとしようか。よーい、どん！」

よし、とりあえず作るものを決めようか。

お、鯖があるやん。作ろー

side cook

鯖を三枚におろす

おろし1枚を半分にする

80度のお湯でさつと通す

氷水につけて滑りを取る

鍋に醤油、酒、水、砂糖を入れる

落し蓋をして中火で煮る

沸騰したらアクを取る

味噌を入れる

中火で約6分

火を止めて10分間放置出来上がり

side out

ふう、出来た。

晴「どうぞ、父さん。『鯖の味噌漬け』だよ。」

秋「上手くなったな。合格だ。夜、楽しみにしておけよ。」

晴「おう！絶対に負けないから」

秋「言ってる。」

んー、10人は普通に受かってるんだよな

父さんのゆるくない？

秋「みんな、合格おめでとう。明日からも励むこと。以上！帰るぞ」

父さんらしいな。

晴「アリス、リヨウ、緑。楽勝だったな。」

ア「そうだったね！紅音も落ちてないといいんだけど…」

リ「落ちてないだろ。」

晴「大丈夫か。」

さ、父さんと久しぶりの勝負だから、本気を出さないとな。

第13話 地獄の合宿2日目 2

秋「よし、晴翔。お前がどこまでうまくなっているか、勝負をしようじゃないか。」

晴「ああ。僕が今日までに学んだことを全て詰め込んでやる！」

秋「いつもどおり、審査は未恵にしてみらうが…見学者多くね？」

晴「父さん、ビビってるの？何人いようが関係ないだろ？」

秋「あ、ああ。そうだな。」

確かに多いよな。情報は出回ってるのは承知していたけど…

創真と恵以外の極星寮のみんなと、最先端研究会のみんな。あとは、誰だ？

未「じゃあ、今回のメイン食材を決めさせてもらうわね。今回は…これにしましょう

か。食材は『納豆』よ。制限時間は、2時間。それでは、始め！」

んー、納豆か。納豆ご飯じゃ、絶対に父さんに負けるな。

じゃあ、いっちょ冒険を試してみようか。

晴「できました。『納豆ハンバーグ』です。美味しいかどうかは、食べてからのお楽しみで」

未「へー、晴も面白いのを出す様になったじゃない？美味しいじゃない。でも、まだ私たちには程遠いわよ？」

晴「そのくらい、百も承知だ。でも、また負けるのか…」

秋「出来たぞ。晴翔はよく食ってたやつだ。『爆弾丼』だな。食べてみな」

未「あら、懐かしい料理じゃない。やつぱり、秋さんの料理は美味しいわね。この勝負は秋さんの勝ちよ。」

秋「あり！」

晴「また負けた〜」

これで、何回目だろ？

秋「これで、俺に負けたのは、149回目だな。」

モブ「ええ！そんなにも秋干先輩と！」

晴「父さんとはそんなもんなんだよね。てか、父さんも母さんも大人気ないんだよ！」

秋・未「言い訳にしか聞こえないな（ないわね）！」

晴「全く、酷い人だ！絶対に次は負けない！」

秋「それ、毎回言ってるよね？」

晴「知らん！」

さあ、今日の用事は、善二の部屋で遊ぶだけだな。

悠「晴翔君はすごいよね！あんな格上の人と、ずっと戦い続けてたんでしょ？」

晴「あー、父さんには、149回。母さんとは1050回やったかな？全部、黒星だけだね」

涼「晴君、それはやり過ぎよ…」

晴「でも、そのおかげで技術はついてきた。」

縁「無謀にもほどがあるぞ…」

創「てか、そんなことやってたのか？」

晴「そうだよ。ところで、創真と恵は何をやってたの？」

創「四ノ宮先輩と退学かけて、食戟」

ん？んー？食戟？あの、食戟だよね？しかも退学かけて？

縁「創真も命知らずだったか…」

創「でも、いいものはもらえたな。」

晴「肝が座ってるな。」

皆「それは、お前もだろ！」

晴「はは、そうだね。」

あんなこと、ずっとやってりや座るって。

あれ、僕ってバカだよな？あー、こりやダメだ。取り返せないな。晴「よし、今から食戟してくる。その、四ノ宮先輩って人潰す。」

緑「何言ってるんだ、あほ。お前は寝とけ」
晴「ゲフツ…」

うわー、ひでー。頭殴るとか酷いだろ。

あ、これダメなやつだ。意識がー…

第14話 地獄の合宿 3日目、4日目 1

銀「遠月学園、全生徒の諸君。今から1時間後、22時に制服に着替えて大宴会場に集合してくれ」

パタ

晴「善二が倒れた!!？」

銀「全生徒諸君。今集まってもらったのは、明日の課題についてだ。遠月リゾートの朝食の新メニュー作りだ。メインの食材は卵。ビュッフェ形式で提供してもらう。集合は明日の午前6時。その時刻に試食できる様、準備してくれ。では、明朝また会おう。解散」

ふむふむ。高級リゾートホテルの卵を使った新メニューを考えろ、と。

ビュッフェってことは、何枚以上で合格とかなりそうだな。

…決まったな。多分大丈夫だろう。みんなのどこに行くかな

ア「ふーん。中々美味しい品ができそうね。」

創「あ、そう？サンキュー。」

創真がアリスのことジロジロ見てるな。なんか、ムカつく…

ア「明日の朝が楽しみね。」

晴「本当に、楽しみで終わればいいけどな…」

ア「そうよね。…ん？」

ドン

創「晴翔？もう終わったのか？」

ア「ちよつともう、突っ立ってないで、どいてよね！」

晴「終わったよ。よ！アリス、リヨウ。」

リ「けど、お嬢がこの位置で立ってろって言うから…晴翔、明日が楽しみだな。」

ア「それは、相手を威嚇するときだけでも言ったわ！って、晴くん!!?」

晴「本当、お前らしいコンビだよな。嫉妬するわ。ってか、早起き辛くね？夜更かし

の方がまだ余裕だわ」

ア「少しでも寝なさいよ！それに…

嫉妬だなんて、本当は隣が晴くん

ならいいのに…」ボソツ

晴「なんか？寝つちやつたら起きれないんだよね。うん？なんか、言った？」

ア「な、何も言っていないわよ!!?」

創「晴翔、お前も大変だな。頑張れ。」

なんで創真に励まされてるの!?!? ってか、アリス顔真つ赤!リヨウは、困ってんな…
リ「お嬢…落ち着いて…」

ア「じゃ、じゃあね!晴くんなんて、知らないから!!?」

なんで、怒られなきやいけねんだよ。

晴「理不尽すぎんだろ!?!?」

創「お前、もう寝とけよ…」

晴「んじゃ、眠るとしよう。創真、襲わないでね?」

創「誰が襲うか!」

晴「えー、つまんない。嘘だからね?だから、包丁を投げようとししないで?ね?」

今日は、すっごく疲れたぞ?

創真を落ち着かせるのに2時間かかったし、アリスはなんで怒ってるかは分からん
し。

はあくもう寝るかな…

おお!会場がひれー!ここでやるのか?やっちゃっていいのか?

アリスもこの会場か。こっち向いたと思ったら、そっぽ向くし…僕、なんか嫌われる

ことしたつけ？（晴翔は結構鈍感です）

あー、あそこにいるのは創真に負けた子じやん。へー、いい料理やん。
ん、と？俺の隣は、誰だ？

モブ「お前は、晴翔！お前には負けないからな」

なんだ、モブキヤラクくんじやないですか。君なんか僕に勝てるわけないでしょ？

モブ「声に出てるんだよ！なめやがって…」

あー、はいはいめんどくさいよ？客は全部取ってやるから、頑張りたまえ。

銀「各自、準備はできたな。これより合格の説明に入る。まずは、審査員の紹介だ。遠月リゾートの食材を提供してくださっている方々。及びそのご家族に来てもらった。毎年この合宿にの審査を務めてもらっている。そして、我が遠月リゾートの調理部門・サービス部門の人にもやってもらう。合格基準は2つ。生産者と現場のプロに認めてもらうこと。それから、今から2時間以内に200食を食してもらうこと。以上だ！では、審査員の皆様。存分に朝食の時間をお楽しみください。」

へー、200食か。いけるかな。やっぱり、目標は高く400食以上だな。持って来てる量は600食分はあるか

第15話 地獄の合宿4日目 2

晴「どうぞ。『パンケーキ』です。僕なりのアレンジが加えてあります。」

よし。まずは客を捕まえることが出来たぞ。

客「美味しい！」

スタートにしては、上々だな！このままさらに客を増やす！

客「鮮やかな料理の仕方だ。どれ、一皿食べてみようか。ん！これは！スズメバチのハチミツずけだね？しかも、これ程の甘みとは！」

晴「正解です。自家製のなんですよ。母さんと2人で試行錯誤して作ったものです。」

客「みんなに広めてくるとしようか。美味しい品をありがとう。」

晴「いえ、お客様に最大のおもてなしをするのが料理人ですから」

当たりを引いたな。200食は余裕だな。これ、食材が足りるか？

隣のモブキャラくんは、と。

晴「あれあれ？僕に勝つとか言つてたのはどいつだっけ？10皿もさばけてないじゃないですか？そんなんでいくんですか？」

モブ「う、うるさい！これからだ！」

銀「楓鷲 晴翔。200食達成。」

晴「これからも無くなるまで作り続けますよ？どうぞ！じゃんじゃん来ててください！」

客「俺も食いたい！私も！僕も！」

お、これは頑張つて作らないとな。

ア「すいませーん。食材なくなっちゃたんで終わりにしていいですか？」

アリス終わったのか。これで、さらに客足が僕の元にくるな。

ア「晴くん、すごいね！」

晴「あー、アリスか。終わってからでいい？これは集中しないと追いつかんわ」

ア「えー、しょうがないわね。」

よし。あと200食は伸ばしてやるぜ。(300食現在)

銀「これにて、試験を終わりにする。合格者は次に備えてくれ。」

ふー。終わったか。数えよつと。

………ん？………500食いった………か………？は………？

ア「すごいわね！晴くん！」

リ「晴翔、流石だな。」

紅「これは、行き過ぎですよ。」

晴「悪い。現実が信じられん。」

いやいや、2時間で500食に届くか？普通。まあ、途中くらいから料理だけに集中してたからわからなかったけどさ。

極星「晴（くん）翔（くん）には、勝てないわ…」

晴「みんな受かったんだね。極星寮でみんなで帰れる？」

緑「最後に残ってるぞ。行こうぜ。」

銀「合宿お疲れ様。最後の課題は卒業生で組んだフルコースだ！合格生徒439名！

存分に楽しんでくれ！！

合格者「よっしゃー！！！！」

すごいな。どれもすごくうまい！流石は卒業生の先輩たちだ。

博「晴翔くん、君は遠月リゾートに来る気はないかな？君ならすぐにできると思うのだけど？」

日「ダメです！私が晴翔くんももらいます！」

小「日向子、ダメだ。こいつは俺がもらう。」

レ「ワタシの所で働く気はないデスカ？」

冬「私のところに来る気はない？」

わー、すごいな卒業生の先輩たちが…

って、父さんと母さんはニヤついでるだけ!?!?

晴「お気持ちはあるがたいのですが、僕は父さんと母さんの定食屋を継ぐつもりなので…でも、修行として行かせてもらえれば嬉しいのですが…」

先輩「うちのところに来なさい！」

怖いって…

秋「おい、晴翔が困ってるだろ？俺が後で修行先の店を決めるから黙っとけって。」
父さんすげー。

秋「ま、お前が俺らに勝てるまで譲らないけどなw」

晴「よし。絶対に鳴かせてやる！」

こうして、地獄の合宿は終わった…らしい…

第16話 地獄の合宿終了!

慧「みんな、おかえり。」

極星「ただいまー!」

ふう。とりあえずみんなでかえってこれたな。恵と創真もバカやってたから不安だったんだよね。誰一人消えないでよかった。

城「おう、創真、帰ったか。ちよつと手伝つてくれ。」

創「おう。」

城「それと、晴翔。お前も手伝え」

晴「了解したぜ。」

え? いこなり手伝えって?

創「なんで親父がここにいるんだよ!」

晴「たしか、銀先輩と同じ時代だったからでしょ?」

城「まあ、途中でやめちまったがな。」

創「てか、なんで晴翔が親父のことを知ってんだよ!」

えー? いつだっけな

晴「たしか、父さんが旅に出る前に来たんだよね。だから、知ってた。」
すごかったんだよね。今まで僕は何をして来たのかわからなくなつたからさ。

極星「今夜はパーティだ！」

やつぱり、城一郎先輩の料理はうまいな。つて、まだゲテモノ料理してたんだ。

晴「そういえば、なんでここに来たの？」

城「それは、ちよつと、な……」

教えてくれいよ。まあ、たぶんあの人のことだろうけど。父さんも言つてたし。

晴「そういえば、父さんと母さんがすごく怒つてましたよ？次あつたら絶対に泣かしてやるから。つて言つてました。」

城「え？嘘だろ？俺、殺されるじゃん。」

ふ「懐かしいね。あの頃はいろいろとあつたからね。秋干と未恵がいなかつたら城一郎も銀もここまですごくはならなかつただろうね。」

城「毎回、2対2で挑んで負けてたからな。そんな息子が創真と同一年つて聞いた日
にや、遠月が最高だと思つたさ。」

晴「それに、総帥の孫娘2人もいるからね。」

慧「今年の遠月学園はすごいですからね。流石は、玉の世代と言われてるだけはある

ます。」

晴「創真がその中心ですかね？」

慧「その可能性なのかもしれないね。」

技術がすごい人が多いのは認めるよ。

創「そういうえば、薙切が秋の選抜がどうのこうのって言ってたっけ。」

なんにや？ それ？

慧「遠月十傑以外の1年生最強を決める大会みたいなものだね。今の十傑のほとんどが決勝まで出てるよ。そろそろメンバーが決まる頃だから、しっかりと気にはしといてね。」

晴「創真！ 線！ お前たちには絶対に負けないからな！」

創「お前になんか負けるかよ！」

線「俺は、選抜で最高な料理を出すだけだ！」

極星「私たち（俺たち）のことも忘れるな！」

あはは、最高だな。この寮は。

今日は選抜の発表日です。

えっと、あったあった。僕はBブロックか。アリスと紅音が同じか。まけねーぞ。

ア「晴くんも同じブロツクね。勝負よ！」

紅「私も負けません。」

晴「やめとけ。Bブロツクを1位抜けして優勝するのは僕だから。」

Aブロツクも激戦になりそうだな。

お題はカレー？試作をしまくるしかないのか。たしか、汐見ゼミがスパイスやっ
たって聞いたな。明日あたり行くか。

秋の選抜

第17話 汐見ゼミへ

晴「あれ？創真と恵を汐見ゼミに行くの？」

創「おう。いろいろと親父に聞いたからな。」

えー、僕は何も聞かされてないですけど？

創「ごめんください。」

晴「あれ？誰もいないな。」

なんだ？本当にいないのか？

あ、いた。

創「あの…」

潤「え！お客さん!?？すみません。今お茶を出しますから。」

身長小さいな。え？僕もだつて？君ら、ぶち○すよ？

恵と潤先輩？が謝りの無限ループに入ってるな。

創「あの、こここのゼミの先生は？才馬城一郎の息子が来たつて言ってもらえ
ありやりや、創真選手、ノックアウト！戦闘不能だ！

潤「才馬城一郎の息子？今すぐに出て言ってください。」

晴「あの、僕は秋干と未恵の息子なんですけど……」

潤「秋先輩と未恵先輩の息子さん?!?これは、申し訳ありません！」

ア「潤、頼まれた品、買って来たけど……」

そりや、言葉をなくすよな。うん。わかるぜ。

晴「君が、『葉山 アキラ』か。おもしろいやつだ。」

ア「お前は、晴翔 だっけか。」

潤先輩の回想がやばいな。あれ、事あるごとに父さんと母さんが出てくる気が……

潤「それで、私を助けてくれたのが、秋先輩と未恵先輩なんです。」

へー、流石は僕の父さんと母さんだ。

つてか、スパイスって美容にいいんだ。初めてしつたな。

恵「私たち、極星の生徒で、スパイスについて教えてもらおうと……」

潤「そつちの、女子と先輩の息子さんなら、教えてもいいです。」

ア「悪いな。せつかくの客を邪険にして。俺はお前らと一緒に1年の葉山アキラだ。」

こここで助手をやつてる。」

恵「へー、ゼミに入るのって普通、2年生からだよね？」

ア「しようがないんだよ。その女には、俺が必要だからな。スパイスをいじる以外、何もできない女だからな。な、潤?」

潤「潤って呼ぶな! 汐見教授でしょ!?! 葉山くんは私の助手なんだからそこはちゃんと礼儀を持って…」

ア「潤? 今日の水やり当番忘れてたぞ?」

これってさ? アキラが親で潤先輩が娘になってる気がするよね?

ア「カリパツタってなのスパイスだ。カレーリーフって呼ばれ方もあるな。」

晴「へー、これが潤先輩のすごさってことか。」

ア「よくわかったな。それも潤の研究テーマなんだ。熱帯地方限定のスパイスを国内生産の確立。冷凍技術を駆使した、長期保存の方法の発見や新しい調味成分の発見も、次々に成功させてる。」

すごい人なんだな。

カレー、美味かったな。天辺を取るためには、こいつも超えなきゃいけないのか

ア「旨さよりも見た目よりも、まずはじめに届くもの。咀嚼しえんかしても漂うもの。

それが香り。料理を制するものは香りを制するもの。すなわち、遠月の天辺を取るのは

『葉山アキラ』この俺だ。」

創「お返しするは。あんたが作ったカレーよりも美味しいもんを、選抜のカレーで食わせてやるよ。」

晴「忘れてるようだけど、僕はブロックは違うよ？でも、天辺を取るはこの僕かな？」

第18話 秋の選抜 予選 B ブロック

「もしもし、父さん？帰るよ。」

秋の選抜向けて、やらないといけないからね。

晴「ただいま。父さん、母さん、宮白さん。涼くん。」

秋「おかえり。なんで、帰って来たんだ？」

晴「それはね、久しぶりに帰りたくなったのと、秋の選抜で優勝しないといけないから、涼くんにカレーとスパイスについて教えてもらおうかなとおもってた。」

秋「懐かしいな。はじめて未恵に負けたんだよな。」

未「公式の場ではそうですね。」

それまで何してたんだよ。

涼「カレーとスパイスについて、だよな？2週間覚えてもらおうよ？」

よっしゃ。ばっちこいだけ！

創「よう、晴翔。お前には負けないからな。」

晴「いやいや、どうやってやんだよ。」

ア「点数で決めればいいだろ。」

リ「晴翔！お前には負けないからな！」

晴「何言ってるんの！僕は誰にも負けないからね？」

タ「幸平！真のライバルは俺だからな！」

晴「あれ、隣にいるのって、イサミだよ、な？」

タ「何を言ってるんだ。イサミに決まっているだろうが。」

わからんって。うん。

イ「もう大丈夫だよ。秋冬かけて体重も戻ってくからね。」

総帥「当会場は通過『月天の間』本来は十傑の食戟のみ使用される。歴代の第1席の肖像画を掲げている。数々の名勝負と数々のスペシャリティがここで生まれた。だからここここでは漂っているのだ。鬼のように続く記憶が。そして、秋の選抜本戦はここで行われる。諸君らがここで新たな記憶を刻むのだ。再びここで会おうぞ。」

総帥のおかげで指揮が上がってやがるぜ。

昭・大「田所！吉野！晴翔！頑張れ！」

応援が聞こえてくるなんてはじめてだな。頑張らないと、な！

生徒「なんだ！あいつのカレーの匂いは！すげえ、美味そうだ！」

だろ？でも、もう片方は開けてやんねーよ。

司会「終了です。料理をやめてください。」

お? 1番手は紅音か。

紅「どうぞ。ただのスパイスカレーです。」

審査「美味いそして、辛い!」

点数は…89点! 高得点だな。

つてか、みんな得点低いな。あ、アリスが95点だつて。超えたら、1位だな。

司会「最後です。楓鷲 晴翔くん。お願いします。」

晴「どうぞ。『黒と白の相宴』です。香りが強いのでお気をつけ。」

審査「なんつー香りや! 美味そうだ! では、さっそく一口!」

…審査員が固まったぞ?

司会「あのく動いてもらいませんか?」

審査「すまん。では、黒の方をいただけよう。」

…また止まりました。動いたら、速攻で食ってるし…

晴「あ、残しといってもらえますか? そしたら、黒と白を合わせて食べてみてください。」

審査「…あれ! なくなってる! おかわりは?!? ないの?!?」

晴「どうぞ。説明しますね。ホワイトカレーの方には、カルダモン、シナモン、ロー

リエ、クミン、クローブ、ブラックペッパー、フェヌグリーク、コリアンダー、クミン

パウダー、カルダモンパウダー、ホワイトペッパーを。ブラックカレーの方には、カレー粉、パプリカ、ターメリック、ガラムマサラ、コリアンダー、クミン、唐辛子を入れています。」

審査「これは、美味すぎる！」

いい感じだな。

生徒「あいつ、すごいぞ！」

点数は…

司会「点数は、98点です！」

晴「よっしゃ！取った！」

これで、1位だな。

ア「晴くん！本戦では絶対に負けないんだからね！」

タ「僕は君を侮っていたようだ。」

緋「さすがは、えりな様の試験を合格しただけはある。」

晴「言つとくけど、お前らにも負ける気はねえからな？」

さあ、Aブロックはどうなったかな？

第19話 秋の選抜 予選 Aブロック

Aブロックで料理の結果が出ている中：

side midori

生徒「おいしい、また0点だぞ。」

審査員が辛口のコメントしか出ていなかった。

審査「こんなんじや、審査するに値しないわ」

超、辛口だな。どうせ、俺が勝つがな。

黒木場 リョウってやつの番だな。晴翔が実力を買ってたが、どんなやつなんだ？

審査「深い…森…」

お、はじめて二口目にいきやがった。

審査「コニヤックだ。」

リ「そうつす。ナポレオン級のコニヤックを使ってみたつす。」

コニヤックって、樽の匂いがついてるやつだよな…？

あ、態度が変わった…？

リ「味噌をこいつを入れて、こいつをすすれ！それが1番美味しい食い方なんだ！」

荒々しい口調になったな。性格がまるで違うぞ
点数は、93点か。トップレベルだな。

次は葉山か…あいつの土俵だな。

つて、香りすごいぞ！

点数は、94点。黒木場を超えて来たな。

次は創真か。ん？オムライス？

つて、あいつも香り爆弾かよ。

点数は、93点か。ラストは俺がもらってくぞ。

司会「最後に、草楼 緑選手です。」

緑「どうぞ。『爆弾チーズカレー』です。」

さっきのお二人さん同様に、香りを詰め込んであるよ。

審査「先ほどの2人と引けを取らない香ばしい香りだ！」

ア「お前のやつ、クミンシード、ローリエ、パプリカパウダー、チリパウダー

、カルダモン、コリアンダー、ターメリック、ガラムマサラ、シナモンが入ってるな。」

緑「正解だ。全部自家製だな。」

審査「今回の依頼、受けてよかった。」

生徒「審査委員の人たち、絶賛じゃねえか。」

司会「点数は…96点です！」

とりあえず、一位通過だな。

創「お前の料理、すげー美味そうだな！」

緑「は？創真にはまけねえって。あっちを見ろ」

創「ん？」

Aブロックで残ったか。

side out

side haruto

司会「点数は…96点です！」

緑が一位になったか。でも、僕が総合1位だね。

あ、いるのバレた…

晴「お前らが、決勝で当たる可能性があるのか。楽しそうだ。」

アキ「お前が来たのか。ギリギリだろ？どうせ。」

アリ「晴くんは、1位よ！」

創・アキ「は…!?？」

晴「ついでに、総合でも1位だな。決勝でも負けないがな。」

Aブロックの2名、顔が固まってるぞ？

アキ「お前が1位……？ばかな……」

創「でも、本戦では負けねえからな」

いいね。そうこなくっちゃ。

リ「本戦で、現在のトップが決まる……そこで決着をつけるぞ……！」

アキ「安心しろ。そこで俺が1位になる。」

アリ「何を言っているにかしら？そこでは私が勝って、えりなにも勝つのよ？」

タ「いいか！幸平！真のライバルは俺だからな！そして、優勝も俺だ！」

緑「晴翔には負けたが、一応俺がAブロックトップだからな？晴翔にも勝って1位になるから」

緋「えりな様の次に十傑入りするのは私です。なので、私が優勝します！」

創「俺は、誰にも負けねえからな！全員、ぶっ倒す！」

晴「いいねえ。挑戦、受けてやるよ。どうせ、俺が優勝の座をもらうがな。」

薙切「えりなを除いた、1年生のトップが本戦で決まる。」

この戦いがあと少しで始まるのだ！

第20話の秋の選抜 本戦第1回戦 前半

今日は、本戦第1回戦の1試合目と2試合目日です。

1 試合目は創真 対 アリス

2 試合目は僕 対 緑

3 試合目はアキラ 対 タクミ

4 試合目はリョウ 対 緋沙子

になってるね。今は創真 対 アリス の戦いをやってるね。

正直、アリスに勝って欲しい気持ちの方が高いんだよね…

もちろん、創真も応援してるよ？

でも、アリスの方が一緒にいた時間が長いし、同じ研究会だからさ。

総帥「第1試合、勝者 幸平 創真！」

アリスが、負けた…マジか。創真もやるな。

次は僕の試合だ。絶対に勝たないと。僕のために！

晴「アリス、泣いてんじゃねえよ。泣いてたら、僕の対決が見れないだろ？ほら、立つ

て。」

さあ、行くとしようか。

司会「先に現れたのは、Bブロック1位、総合1位の楓鷲　晴翔選手！予選のように1位になるのでしょうか！」

今回は引き締めないと負けるな。

司会「次に現れたのは、Aブロック1位、総合2位の草楼　緑選手！晴翔選手を破つて1位になるのでしょうか！」

この雰囲気は、いいねえ。最高だ！

司会「今回のお題は『麺類』です！制限時間は2時間！試合、開始！」

僕は、担々麺だぜ！緑は：うどんか。

晴「これで、AブロックかBブロックのどっちが最強か分かるな。」

緑「晴翔、お前には絶対負けなねえから。地を舐めさせてやる！」

よく言うぜ！でも、俺が今回は、もらってくぞ！

司会「終了です！先行、草楼選手お願いします。」

緑「どうぞ。『かけうどんの卵とじ』です。」

かけうどんとききたか。優しい味が出てて、こりやまた美味そうだな。

審査「これは、美味しい！鶏ガラスープとききましたか。」

緑「その通りです。卵にもマツチして美味しいんですよ。」

あ、総帥がはだけた！それほど美味しいってことか。

審査「完璧に近い。これで、学生なの……」

本戦に出るのはレベル高いからな。僕も含めて。

次は僕だ！

司会「後攻は、楓鷲選手です！お願いします！」

晴「どうぞ。『辛さガン上げ担々麺』です。匂いにお気をつけ」

さあ、こい！

審査「これは！か、辛い！香りだけで、持ってかれてしまう！」

だろ？僕が食べた店でそういう店があったから、今回研究したんだよね。

審査「辛い、美味しい！病みつきになりそうだ！」

晴「豆板醤と唐辛子を大量に。それと、麻辣醬が入って辛くなっています。」

生徒「総帥のおはだけが出たー！」

よし、さあどうなる。

司会「では、結果をお願いします」

審査「難しいな。」

結果は…

総帥「第2試合、勝者 楓鷲 晴翔！」

晴「よっしゃ！勝ったぜ！いい料理をありがとう。緑」

緑「負けたよ。でも、次は負けねえからな」

2回戦でだれにあたるかだよな。